

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A Study of the process of popularization of Meiji Era scholarly terms : Comparisons of words in "Tetsugaku Jii" and words in media vocabulary lists

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真田, 治子, SANADA, Haruko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002079

明治期学術漢語の一般化の過程

——『哲学字彙』と各種メディアの語彙表との対照——

真田 治子

(東京学芸大学非常勤講師)

キーワード

明治, 専門用語, 一般化, 基本語彙, 哲学字彙

要旨

幕末から明治初期にかけて、西欧文化との接触や文明開化の影響によって数多くの新しい単語が生じた結果、日本語の語彙はその基本的な部分にまで大きな変動がもたらされた。この研究は、そのような語彙の中でも特に学術分野の専門用語の一般化の過程をとりあげ、現代の各種基本語彙表や、明治から現代までの雑誌・新聞・テレビなど各種メディアにおける変遷を主に計量的手法によって明らかにしようと試みたものである。その結果、一部の専門用語は基本語彙表や現代メディアの比較的高頻度の階級に見られるなど、現代日本語の中核の部分に深く浸透していることがわかった。このような学術漢語の一般化の現象は特に雑誌などでは、明治初期から急激に進行し、1900年前後には現代の様相の基礎が既に形成されていたと推定される。

1. 調査の概要

幕末から明治初期にかけて、西欧文化との接触や文明開化の影響によって数多くの新しい単語が生じた結果、日本語の語彙はその基本的な部分にまで大きな変動がもたらされた。この研究ではその主要な要因を学術分野の各種専門用語の一般化に求め、計量的手法によって近・現代の日本語基本語彙の形成過程を究明しようと試みた。

1881年に出版された学術用語集『哲学字彙』(井上, 1881)は物理, 法律などを含む多分野の用語を収録しているところから、万学の基礎としての語彙を集めたものと考えられる。用語の多くは漢語であり、その中には江戸時代既に学術的な意味で使用されていた語や中国で使われていた語、明治の先覚者が欧米語から訳した語、さらにはかなり一般的な言葉も含まれているが、すべては学術を語る上で当時必要と考えられた言葉である。ここでは、これらの漢語を「学術漢語」とよぶ。この「学術漢語」が一般社会に浸透していく様相を、現代日本語の中核である基本語彙表や雑誌・新聞・テレビなどでの特に「語の使用」という観点から、以下の資料と対照させて主に統計的手法を用いて考察した¹⁾。

(1) 現代日本語の基本語彙表に『哲学字彙』(井上, 1881)の「学術漢語」がどの程度採用されているかを調べた。日本語を母語とする児童を対象にした「国語教育基本語彙」と、外国人の日

本語学習者を対象にした「日本語教育のための基本語彙」という二つの観点から調査を行なった。

(2) 明治初期の「学術漢語」が、現在の語彙の中でどのような位置を占めるかについて、現代の語彙を代表するものの一つとして国立国語研究所の現代の雑誌・新聞・テレビといった現代メディアの語彙調査(1962a, 1962b, 1970, 1971, 1995, 1997a, 1997b)をとりあげ、これと対照させた。

(3) 明治から戦後にわたる語彙の変遷の中でどのような位置を占め、変化してきたかについて国立国語研究所の1906年から1976年までの雑誌『中央公論』の語彙調査の結果(1987)をとりあげ、これと対照させた。

(4) 『哲学字彙』が出版された時期に近い資料での様相を見るため、国立国語研究所の郵便報知新聞(1877~78年)の語彙調査の結果(1959a, 1959b)や、同研究所が作成した1901年の雑誌『太陽』のコーパス(2001)と対照させた。

各資料と一致した語のうち、度数の多い順に上位約20語を参考として[表1]に示した。

『哲学字彙』(初版)の訳語は『哲学字彙 訳語総索引』(飛田, 1979)の索引の部によれば2,812語ある(異なる読みの重複見出しを含む)が、ここから以下の条件によって1,847語の漢語を抽出した。

表1 各資料における「学術漢語」の度数順上位約20語(度数の多い順)

資料	郵便報知新聞	太陽	中央公論	中央公論	中央公論	中央公論	中央公論	中央公論	中央公論	中央公論	雑誌90種	新聞	TV
年	1877-8	1901	1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1956	1966	1989
	人民 裁判 政府 規則 一般 法 自由 説 貿易 類 試験 方法 公使 次第 売買 法律 利益 検査 輸出 選挙	政府 教育 社会 国民 問題 必要 政治 結果 世界 発達 国家 輸入 関係 主義 方法 事实 利益 一般 目的 法律	社会 自然 成功 要求 問題 国民 世界 文学 人間 自由 教育 主観 政治 自己 精神 法律 革命 人民 進歩 説 批評 原因	政治 世間 事实 政府 国家 社会 自然 問題 国民 人間 自由 教育 関係 満足 現在 世界 精神 法律 多数 結果 同時 組織	社会 人間 発達 世界 事实 問題 法律 資本 関係 国民 文学 政治 現在 結果 時代 理由 程度 自然 反对 国家 自由 想像 最後	国民 事实 問題 社会 世界 政治 現在 自由 国家 必要 資本 関係 科学 思想 自然 自己 義務	政治 社会 資本 国民 問題 国家 世界 必要 科学 现实 事实 根本 反对 人民 人間 政府 自由 自然 文学 困難 完全 結果 封建	問題 政治 社会 国民 必要 事实 共産 世界 人間 憲法 変化 自由 文学 意見 国家 反对 結果 一般 態度 時代 農業 革命	問題 世界 社会 政府 人間 事实 必要 国民 自由 存在 现实 現在 政府 精神 思想 意見 革命 関係 利用 哲学	問題 法 必要 時間 人間 関係 時代 世界 人 現在 部 社会 主義 自由 数 程度 政府 利益 事实 一般 資本	部 名 経験 問題 政府 時間 社会 世界 数 関係 不動 教育 工業 政治 現在 必要 自動 法 電氣 主義	問題 政治 結構 世界 最後 時間 人間 元氣 関係 現在 時代 状態 絶対 政府 動物 必要 普通 教育 社会 選挙	

- 大見出しのみを対象とする。
- 和語・音訳語を除く。
- 接尾語をとり除く。(-的, -性, -学, -論, 等)
- 重複を整理する。

和語・漢語の区別は『新潮国語辞典』(山田・築島・小林, 1991)によった。語彙表との対照にあたっては、調査単位や表記が必ずしも同一ではないため、原則として上記の「学術漢語」の語形を一部に含むものや異表記を広く認めることとし、異表記や異なる読みについては『日本国語大辞典』(日本大辞典刊行会, 1972)を典拠としながら、例えば以下のような点に考慮した。

「博士」を「はかせ」と読んだり「はくし」と読んだりする場合や、「総合」と「綜合」といった異なる表記の見出し語が別に存在する場合、また、「特別」という語のように名詞と副詞など複数回にわたって語彙表に出現する場合は、その各々の度数なり使用率なりを合計した。また、後述する、より「長い単位」の語彙表と対照させる場合も、その語形を含む語が出現するごとに度数を計上した。「気象」という語は、現在は一般的に天候などに関する語として使用されているが、『哲学字彙』では「Spirit」の訳語としてあげられており、現在の「気性」とほぼ同等であると考えられる。この調査では、使用された文脈や意味分野が明らかな場合に、「Spirit」の訳語として適当と思われる「気象」または「気性」の度数を計上した。「暗指」「容止」など、現在一般にあまり通用していない語形や表記の場合も同様に文脈や意味分野を確認しながら度数を計上した。

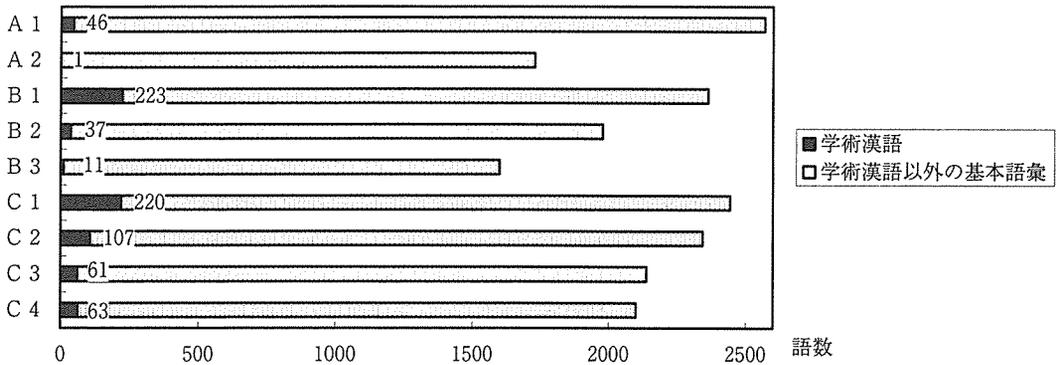
2. 各種基本語彙表における学術漢語の採用

日本語を母語とする児童を対象にした基本語彙表に、「学術漢語」がどの程度採用されているかを調査した。対象の基本語彙表として『新教育基本語彙』(阪本, 1984)を使用した(以下「国語教育基本語彙」)。この「国語教育基本語彙」は「小学校から中学校にかけての義務教育の9年間に、国語の単語を、どのような範囲で、どのような順序で学習させるのがよいかの基準を示したもの」(阪本, 1984)とされていて、小学校低学年(A1, A2)、小学校高学年(B1~B3)、中学校(C1~C4)の計9段階に、19,271語が約2,000語前後ずつ配分されている。この「国語教育基本語彙」を「学術漢語」と対照させた結果、769語が採用されていた。各レベルの基本語彙における「学術漢語」の比率は〔図1「国語教育基本語彙」のレベル別「学術漢語」の語数〕に示す。

「国語教育基本語彙」における「学術漢語」769語は、レベルによる分布にやや偏りがみられ、特にB1(小学校高学年レベル)、C1(中学校レベル)では1割近くを占める。身の回りの生活に密着した小学校低学年の語彙よりも、中等教育へつながる抽象的な語彙が増え始めるレベルにより集中しているといえる。

次に、外国人の日本語学習者を対象にした基本語彙に「学術漢語」がどの程度採用されているかを調査した。調査対象には『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所, 1984)を使用した(以下「日本語教育基本語彙」)。この基本語彙は「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙

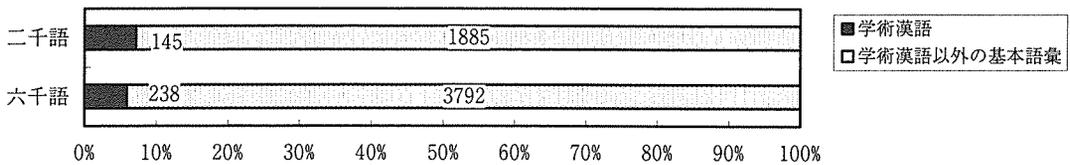
図1 「国語教育基本語彙」のレベル別「学術漢語」の語数



について妥当な標準を得る」ために「六千語を目安に」選定された。また、そのうち「最も基本的で、はじめに学習しておくべき」語が「二千語を目安に」選定されている。正確には前者は「基本語六千」として6,060語、後者は「基本語二千」として2,030語が語彙表にあげられている。

ここでは後者を「二千語レベル」、前者のうち後者を除く(6060-2030=)4,030語を「六千語レベル」と記述する。この「日本語教育基本語彙」には「学術漢語」のうち383語が採用されていた。各レベルの基本語彙における「学術漢語」の比率を[図2「日本語教育基本語彙」のレベル別「学術漢語」の比率]に示す。

図2 「日本語教育基本語彙」のレベル別「学術漢語」の比率



ここでは「二千語レベル」のより基本度の高い語彙にやや多い比率で採用されている。「日本語教育基本語彙」では成人の外国人学習者を想定しているため、日本の社会生活の中核を成す抽象語彙が既に「二千語レベル」に多く含まれていると考えられ、このような結果になったものとみられる。

「国語教育基本語彙」と「日本語教育基本語彙」は「学術漢語」の採用の仕方にあるかどうかを、2 x 2分割表を作成し、 χ^2 (カイ二乗) 検定を使って分析した²。2 x 2分割表の検定については等質性の検定、無相関(独立性)の検定などがあるが、ここでは「国語教育基本語彙」と「日本語教育基本語彙」を2変数とし無相関検定を行なうので、帰無仮説は「2変数は独立しており無関係である」となる。「学術漢語」は1,847語あり、そのうち基本語彙に「存在する」ものを「有」、 「存在しない」ものを「無」として以下にまとめた。「国語」は「国語教育基本語彙」、 「日本語」は「日本語教育基本語彙」を示す。

	日本語		計
	有	無	
国 有	361	408	769
語 無	22	1056	1078
計	383	1464	1847

χ^2 (カイ二乗) 統計量は、555.90で、自由度 1、有意水準 5% に対応する χ^2 分布のパーセント点は 3.84 であるので、 $\chi^2 = |555.90| > 3.84$ より、有意水準 5% で帰無仮説を棄却する。従って 2 変数「国語教育基本語彙」と「日本語教育基本語彙」に出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、両者の「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。これは両者が共に採用した語と共に採用しなかった語の割合が総語数に比して多いことによる。「国語教育基本語彙」と「日本語教育基本語彙」は、「学術漢語」の採用の仕方について相関があるという結果になった。

基本語彙はその社会や教育において中核をなす語であるが、それをいくつかのレベルに分けた場合、レベルによっては多いところでは 7~9% を「学術漢語」が占めていて、国語教育・日本語教育のどちらの基本語彙表も「学術漢語」の採用の仕方は同傾向を示した。

3. 現代メディアの中の学術漢語 —雑誌・新聞・テレビ—

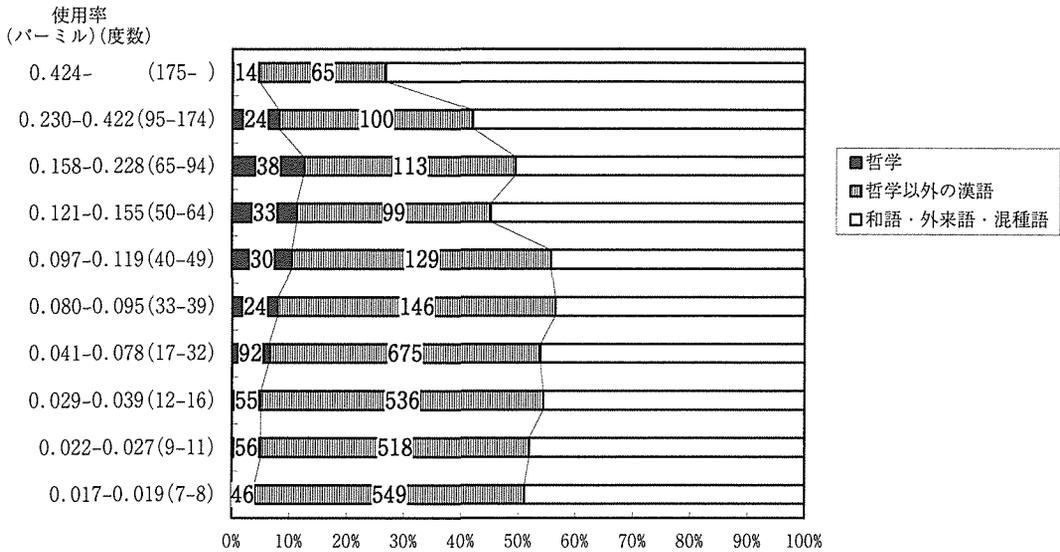
現代の語の使用状況を表す語彙表の一つとして、国立国語研究所が調査した『現代雑誌九十種の用語用字』(1) (3) (1962a, 1962b) 及び『現代雑誌九十種の用語用字全語彙・表記(FD版)』(1997b) (以下「雑誌九十種」) を取り上げ、これを先の『哲学字彙』から抽出した「学術漢語」と対照させた。この資料は 90 種の雑誌の、1956 年分の本文全体から 1/227 の抽出比で抽出した標本調査で、異なり語数は 30,377 語、延べ語数は 412,306 語 (β 単位(短単位)。助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く) である(国立国語研究所, 1997b)。「雑誌九十種」の度数 7 以上の語のうち 412 語、度数 1 以上の語では 833 語が「学術漢語」と一致した。これらの一致した「学術漢語」が「雑誌九十種」の語彙のどの部分に含まれているのかを、使用率の観点からみると以下ようになる。

『現代雑誌九十種の用語用字』(3) (1962b) では、語種による分析を度数に基づいた階級に分けて行なっている。これは、「度数 1」から「度数 65 以上」までの 2 のべき乗 (2^x) を使った 7 階級の分類と、使用率の上位 1,220 語(度数 50 以上) を約 300 語ずつに分けた 4 階級の分類の 2 種類である。

ここでは、この度数に基づく階級分けを参考に、後述の「新聞」のデータとも対比できるように、度数を使用率に換算して、階級分けを行なった。「雑誌九十種」の度数 7 以上の語を使用率の上位から 300 語ずつ 6 階級と 1,000 語強ずつの 4 段階、計 10 段階に分け、412 語の「学術漢語」がどの階級にどのぐらいの割合で属するかを調べた。この階級別のデータを比率によってグラフ化したものが [図 3 「雑誌九十種」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の比率] である。

上位 300 語ずつの 6 階級では、漢語自身の比率が階級が下がるにつれてカーブを描くように増加しているが、「学術漢語」の比率は上から 3~4 階級目がピークになっていて、その下の 2 階級ではやや比率は下がっている。また、1,000 語強ずつの下位の 4 階級では漢語の比率はそれほど変化

図3 「雑誌九十種」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の比率



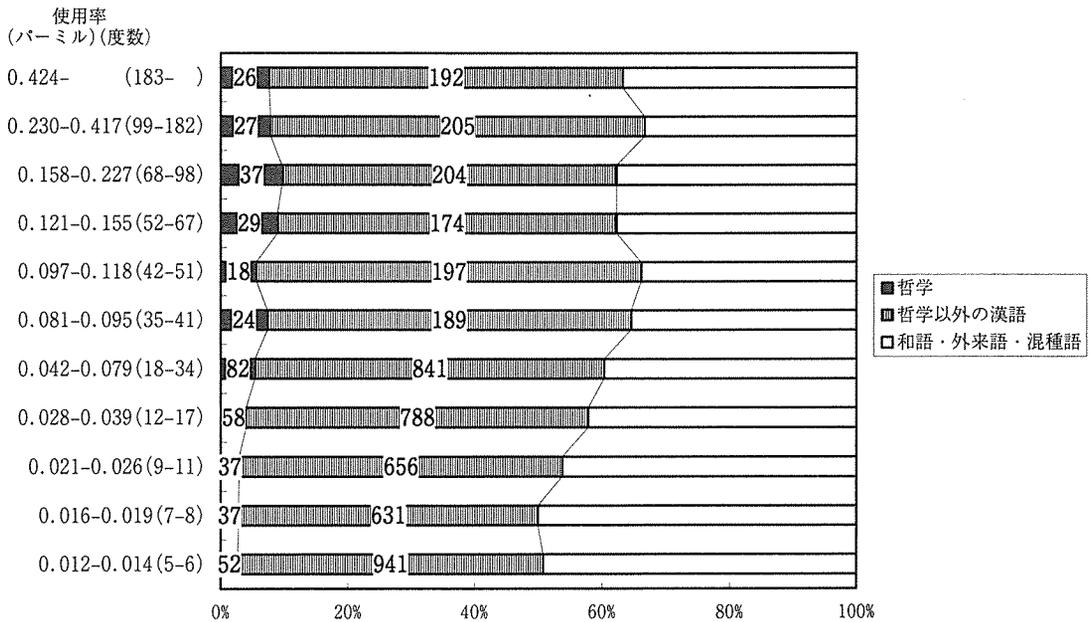
していないが、「学術漢語」の比率はやや下がっている。雑誌における漢語の比率と「学術漢語」の比率は、このように使用率の階級のピークがややずれているといえる。使用率の最上位の階級は和語の占める比率が高いと考えられ、使用率が下がるに従って漢語の比率が増加し、ある一定の比率に達するとその後は比較的安定している。それに対し「学術漢語」の場合は最上位はピークではないものの、比較的上位の階級にピークが出現し、漢語の中でもより高い頻度で使用される語群であると考えられる。明治初期の「学術漢語」の一部の語は、現代において一般によく定着した様相を示していると考えられる。

現代語の語彙表として、同じく国立国語研究所の『電子計算機による新聞の語彙調査』(I)(II)(1970, 1971) (以下「新聞」)を取り上げ、同様に「学術漢語」と対照させた結果、「新聞」の度数5以上の語のうち427語が一致した。この資料は、朝日、毎日、読売三紙の1966年1年分の1/60を標本とし、さらにその1/3を調査したもので、異なり語数は29,822語、延べ語数は431,186語(短単位の場合。助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く)である。

「新聞」の場合も、前述の「雑誌九十種」の場合と同様、使用率によって語の階級分けを行ない、「学術漢語」の属する位置を調べた。「新聞」の度数5以上の語の上位の約2,000語を6階級に、次の約5,600語を4階級に、残りを1階級に、計11階級にした上で「学術漢語」の427語がどの階級にあたるかを、比率によってグラフ化し[図4「新聞」の使用率階級別 漢語・「学術漢語」の比率]に示した。

漢語自身の比率は「雑誌九十種」の場合と異なり、上位の階級から7階級目まではずっと60%以上を維持している。一方、「学術漢語」の比率は「雑誌九十種」の場合ほどの増減はないものの、やはり上から3階級目がピークになっている。また下位5階級における比率は低い。「漢語」の使

図4 「新聞」の使用率階級別 漢語・「学術漢語」の比率



用比率は全般的に「雑誌九十種」の場合より高く、増減はあるがどの階級でもよく使用されている。これは「新聞」の報道活動を主体とする堅い文体によるものであろう。また、「雑誌九十種」の場合と同様に、「新聞」における「学術漢語」は最上位がピークではないが、比較的上位の階級にピークがあり使用頻度が比較的高い語群であると考えられる。

現代メディアの語彙表として、同じく国立国語研究所の『テレビ放送の語彙調査』(I)(II)(1995, 1997a) (以下「テレビ」)を取り上げ、同様に「学術漢語」と対照させた結果、404語が一致した。この資料は、1989年4～6月のキー局7チャンネルの放送から5分間標本を計30時間20分抽出し(抽出比1/504)、その本編とCMの語彙をそれぞれ「音声」と「画面」(に表示される文字)について調査したもので、今回は本編の語彙表を使用した。本編の異なり語数は、音声17,647語、画面7,970語、延べ語数は、音声103,081語、画面20,246語である(記号・ローマ字、人名・地名を含む)が、ここでは「雑誌九十種」「新聞」との対照となるべく条件をそろえるために、題名、企業名、地名、人名など固有名とその混種語を除いた。「問題」「政治」「世界」など度数上位の約20語のうち12語は、「雑誌九十種」ないしは「新聞」との対照結果の上位20語と共通しており、3つのメディアの度数の上位の語には似た傾向があると考えられる。

この3メディアでは、このようにいずれも400語強の語が「学術漢語」表と一致したが、それらはどの程度重なりがあり、どの程度傾向が似ているものであるかを、2x2分割表を作成し、 χ^2 (カ

イ二乗)検定を使って無相関(独立性)の検定をした。「學術漢語」は1,847語あるが、そのうち3メディアのいずれか一つとでも一致した語は557語であった。そこで、ここでは557語を総語数として「雑誌九十種」「新聞」「テレビ」のうちから二つずつを組み合わせて2変数とし、この「2変数は独立しており無関係である」かどうかを検定する。

(1)「雑誌九十種」と「新聞」

	新聞		計
	有	無	
雑 有	357	55	412
誌 無	70	75	145
計	427	130	557

(2)「新聞」と「テレビ」

	テレビ		計
	有	無	
新 有	309	118	427
聞 無	95	35	130
計	404	153	557

(3)「テレビ」と「雑誌九十種」

	雑誌		計
	有	無	
T 有	303	101	404
V 無	109	44	153
計	412	145	557

自由度1, 有意水準5%に対応する χ^2 分布のパーセント点は3.84であるが、 χ^2 統計量は、(1)「雑誌九十種」と「新聞」では88.50, (2)「新聞」と「テレビ」では0.02, (3)「テレビ」と「雑誌九十種」では0.83であった。従って(1)「雑誌九十種」と「新聞」の場合には連関性が認められ、両者の「學術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。これは両者が共に採用した語と共に採用しなかった語の割合が総語数に比して多いことによる。(2)「新聞」と「テレビ」、及び(3)「テレビ」と「雑誌九十種」ではそれぞれの2変数の間に連関性が認められず、両者の「學術漢語」の採用の仕方は独立であるといえる。

「雑誌九十種」「新聞」「テレビ」に出現した「學術漢語」のうち、「雑誌九十種」と「新聞」の場合は両者に出現する語は似た傾向が認められるが、「テレビ」と「新聞」、「テレビ」と「雑誌九十種」では同傾向とはいえない。これは、3つの現代メディアのうち、「テレビ」の場合だけが「學術漢語」の出現の仕方が違っていることを示している。「テレビ」の語彙の総体は、異なり語数の場合で「本編・音声 17,647語」「本編・画面 7,970語」と、音声による語彙量と表記による語彙量の比率が2.2:1という比較的音声に偏った構造をしている。おそらくこの点が他の2つのメディアの語彙構造と異なる特徴を持つ要因ではないかと考えられる。

3つのメディアの中で「學術漢語」が「テレビ」に出現する語は404語ある。このうち、「テレビ」にしか出現しないのは「細胞」「障害」「質量」など72語で、残りの332語は「雑誌九十種」ないしは「新聞」にも用例がある。この内訳をさらに細かくみると以下のようになる。

	音声のみ	音声と画面	画面のみ
- テレビのみ (72語)	58語	8語	6語
- 他にも用例あり (332語)	201語	119語	12語

「テレビ」における「學術漢語」の用例は、「画面のみ」はどちらも少ないが、「音声のみ」と「音

声と画面」の2項目を比較すると、特に「テレビ」だけに出現する語は「音声のみ」に偏りがちである点に特徴があろう。これは、一般的に現代の話し言葉に定着した「學術漢語」が、書き言葉に定着したものとはやや異なっている可能性を示唆している。

一方で「テレビ」にしか出現しない「學術漢語」は、度数の低いものが多く、度数順位で上位68位までは「雑誌九十種」や「新聞」にも用例がある。このことから、「テレビ」に出現する「學術漢語」は度数が多いものは他のメディアとも共通する語が多く、特殊とはいえませんが、度数の低い語には「音声のみ」に出現する特徴的な語を多く含む構造であると考えられる。

4. 「中央公論」(1906年～1976年)における學術漢語

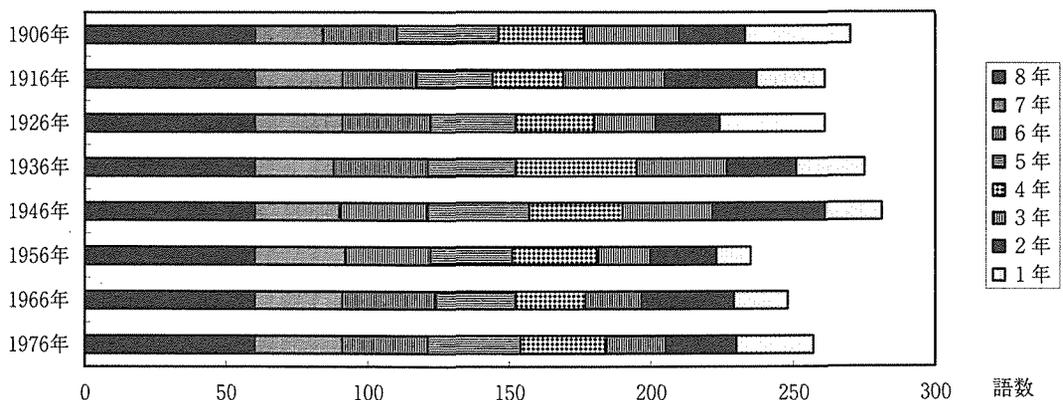
次に、現代までの學術漢語の使用の変遷をみるために「學術漢語」と『雑誌用語の変遷』(国立国語研究所, 1987)の語彙表(以下「中央公論」)を対照させた。この語彙表は1906年から1976年までの雑誌『中央公論』を10年ごとに調査した、8本の標本から成る史的語彙表である。各年の延べ語数が10,000語(助詞・助動詞, 記号を除く。人名・地名を含む)に設定されており, 異なり語数は約4,300～4,900語(抽出比不定)である。

各標本における「學術漢語」の一致数は以下の通りである。また, 8本の標本のいずれかに出現した「學術漢語」は627語である。

1906年	1916年	1926年	1936年	1946年	1956年	1966年	1976年
270語	261語	261語	275語	281語	235語	248語	257語

このうち, 60語は8本の標本のすべてに出現している。この他, それぞれの標本について「7本の標本に共通の語」「6本の標本に共通の語」...「その標本にのみ出現する語」といった, 標本ごとの内訳を[図5「中央公論」各標本の共通語数]に示した。どの年度も非常な偏りがなく,

図5 「中央公論」各標本の共通語数



比較的似た分布になっている。

このように8本の標本に出現した「学術漢語」は構造的には比較的似ているが、内容的には互いの標本に連関性があるといえるか、 2×2 の分割表を作成し、 χ^2 (カイ二乗)検定を使って分析した。8本の標本のいずれかと一致した「学術漢語」は627語であったので、これを総語数として検定した。8本の標本から2本ずつを選んで比較するので計28通りの組み合わせになるが、すべての組み合わせについて χ^2 統計量は3.84を上回った。自由度1、有意水準5%に対応する χ^2 分布のパーセント点は3.84であるので、 χ^2 統計量がこれを上回る時は有意水準5%で帰無仮説を棄却する。従って、8本の標本の組み合わせのいずれの場合も、出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、各標本間における「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。

さらに、その連関性の強さがどの程度であるかを相関係数 ϕ (ファイ) ($= \sqrt{(\chi^2 / n)}$)の値を算出して比較した [表2]。

表2 「中央公論」各標本間の「学術漢語」採用の相関係数

	1906年	1916年	1926年	1936年	1946年	1956年	1966年	1976年
1906年	---	0.311	0.213	0.205	0.194	0.225	0.212	0.185
1916年		---	0.206	0.199	0.228	0.269	0.244	0.270
1926年			---	0.0303	0.267	0.295	0.250	0.243
1936年				---	0.309	0.317	0.310	0.309
1946年					---	0.382	0.262	0.260
1956年						---	0.398	0.365
1966年							---	0.327
1976年								---

この値を用いて「1906年と1926年」「1916年と1936年」というように、年のへだたりが同じ時の組み合わせを集めて ϕ (ファイ)の平均値を求めた。

年のへだたり	10年	20年	30年	40年	50年	60年	70年
ϕ の平均	0.319	0.271	0.260	0.256	0.237	0.241	0.185

基本的に ϕ の平均値は、年のへだたりがひらくにたつて、わずかずつではあるが値が小さくなっていき、類似度とデータの年のへだたりには関連があると考えられる。

この ϕ (ファイ)の平均値から回帰直線の方程式を算出し、その減少傾向を検証した。得られた方程式については、係数をt検定にかけて妥当性を検証した。得られた回帰直線の方程式と決定係数(R^2)は以下の通りである。

$$Y = -0.0017 X + 0.3216 \quad R^2 = 0.8567 \quad t \text{ 統計量} = | -5.47 |$$

t統計量は-5.47で、自由度(7-2)=5、有意水準5%に対応するt分布のパーセント点は2.02

これらの語の中にはその資料固有の事情も含まれている。例えば「太陽」では執筆者の氏名の下に「博士」がよく見られること、新聞に死亡の記事が載ることなどがある。しかしその一方で「人民」から「国民」への語の交替や、「問題」「社会」「世界」など現在の雑誌・新聞の語彙統計で高頻度を示す語が大きく増加していることなど、構造的な変化とでもいえる様子がみられる。

6. 結論および今後の課題

明治初期に『哲学字彙』で採用された「学術漢語」を現代日本語の基本語彙表や雑誌・新聞・テレビといった現代メディアの語彙調査の結果と対照させた。

基本語彙表では、レベルによっては7～9%を「学術漢語」が占めている。基本語彙は社会や教育において中核をなす語であるが、もともとは明治初期に西欧の学問に基づく抽象概念を導入するために用いられた「学術漢語」の一部が、これまでの約150年の間に、日本語を用いて社会生活に参加していく上で使用する語彙の基本部分に浸透したことを示していると考えられる。

現代メディアの語彙では、特に雑誌・新聞・テレビにおいて高い頻度で使用されている学術漢語は比較的共通しており、最も高い使用率の階級にはそれほど多くはなく、次のランクの「比較的高い使用率の階級」を支えている。また、同じメディアにおいての使用であっても、テレビの画面と音声といった書き言葉と話し言葉への定着は若干異なっている。『哲学字彙』で紹介された学術漢語は、出版当時は抽象性の高い専門用語として紹介されたが、この調査結果から現代の抽象概念を表現する語として一般の生活に不可欠な、語彙の中核に存在するものと考えられる。

また、「学術漢語」の史的変遷を、1906年から1976年までの雑誌『中央公論』の語彙調査の結果と対照させて分析した。「学術漢語」の出現の仕方は、構造的にはどの年度も非常な偏りがなく比較的似た分布になっており、どの年も互いに連関性がある。しかしその類似性は均一ではなく、標本の間の年差が小さければ類似度が高く、年差がひらくにつれわずかずつ類似度が低くなっていくといえる。

一方「太陽」と「郵便報知」では、「郵便報知」に使用されていない「学術漢語」が多数「太陽」にみられた。両者に共通の語の一部には明らかな増加ないしは減少傾向が見られ、「学術漢語」の変化の時期であったことがうかがわれる。

これまでの筆者の調査では、和英辞書などの外国語辞書の見出し語に「学術漢語」が採用された時期をみると1870年代から急激に増加し、1905年前後にその伸びが鈍化する傾向がみられた(真田, 2001)。

今回の調査結果と考え合わせると「学術漢語」の一般化は明治初期から急激に進み、1900年前後からその速度が緩やかになり、現在に至った可能性が高い。当時の知識人たちの漢学的知識に支えられた1900年前後までが「学術漢語」のいわば「試用期」であり、知識層の人々に多種が使用されたが、その後は使用される語が限定されていく一方で広く一般に定着し、現代語彙の中核をなすに至ったのではないかと考えられる。

注

- 1 語彙の史的・研究においては、教育の影響、意味変化や用法の変化など重要な問題が数多くあるが、ここではまず手がかりとして、各種資料に語が使用されているかどうかに着目した。
- 2 2つの資料の「類似度」を計る手法には使用率を用いた「宮島のC」(宮島, 1970)「水谷のD」(水谷, 1983)などがあるが、ここでは資料の語の単位の違いから使用率をそのまま使えないため、異なり語数を使って χ^2 (カイ二乗)検定で分析した。
- 3 「郵便報知」の語彙表(国立国語研究所, 1959a)のうち、度数10以上の語をおさめたA表には度数が付されていて、B表(度数9以下)・C表(補充調査の語)には度数が示されていないが、国立国語研究所の許可を得て『郵便報知語彙カード』(1959b)を閲覧させていただき、B表・C表に含まれる「学術漢語」についても度数を得た。

付記

本稿は、国語学会平成13年度春季大会(神戸大学)の口頭発表に加筆修正したものである。また、1995年から1997年までの日本学術振興会特別研究員制度と文部省科学研究費による研究成果を一部含んでいる。国立国語研究所には『郵便報知語彙カード』(独立行政法人国立国語研究所旧言語変化研究部第二研究室(旧近代語研究室)所蔵)を閲覧させていただいた。また、国立国語研究所の「太陽コーパス」試用版である『太陽コーパス Ver.0.3 (1901本文テキスト)』を使用させていただいた。

参考文献

- 井上 哲次郎(1881/1980)『哲学字彙』(初版)名著普及会(1881年 東京大学三学部刊の復刻)
国立国語研究所(1959a)『明治初期の新聞の用語』秀英出版
国立国語研究所(1959b)『郵便報知語彙カード』(独立行政法人国立国語研究所旧言語変化研究部第二研究室(旧近代語研究室)所蔵)
国立国語研究所(1962a)『現代雑誌九十種の用語用字(1)―総記および語彙表一』秀英出版
国立国語研究所(1962b)『現代雑誌九十種の用語用字(3)―分析一』秀英出版
国立国語研究所(1970)『電子計算機による新聞の語彙調査』秀英出版
国立国語研究所(1971)『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)』秀英出版
国立国語研究所(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』秀英出版
国立国語研究所(1995)『テレビ放送の語彙調査Ⅰ』秀英出版
国立国語研究所(1997a)『テレビ放送の語彙調査Ⅱ』大日本図書
国立国語研究所(1997b)『国立国語研究所言語処理データ集7 現代雑誌九十種の用語用字全語彙・表記(FD版)』三省堂
国立国語研究所(2001)『太陽コーパス Ver.0.3 (1901本文テキスト)』国立国語研究所
阪本 一郎(1984)『新教育基本語彙』学芸図書
真田 治子(2001)「外国語辞書にみられる明治初期「学術漢語」の計量的分析」『学芸国語国文学』33, 65-75, 東京学芸大学国語国文学会
田中 章夫(1978)『国語語彙論』(再版)明治書院
田中 章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
田中 牧郎・小木曾 智信(2000)「総合雑誌『太陽』の本文の様態と電子化テキスト」『日本語科学』8, 141-152, 国書刊行会

- 日本大辞典刊行会 (1972) 『日本国語大辞典』小学館
飛田 良文編 (1979) 『哲学字彙 訳語総索引』笠間書院
水谷 静夫 (1983) 『朝倉日本語新講座2語彙』朝倉書店
宮島 達夫 (1970) 「語いの類似度」『国語学』82, 42-64, 国語学会
宮島 達夫 (1997) 「雑誌九十種表記表の統計」『日本語科学』1, 92-104, 国書刊行会
山田 俊雄・築島 裕・小林 芳規編 (1991) 『新潮国語辞典—現代語・古語— 新装改訂版』新潮社

(投稿受理日：2001年7月9日)

真田 治子 (さなだ はるこ)

東京学芸大学

〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1

**A Study of the process of popularization of
Meiji Era scholarly terms:
Comparisons of words in “*Tetsugaku Jii*” and
words in media vocabulary lists**

SANADA Haruko
Tokyo Gakugei University

Keywords

Meiji era, scholarly terms, popularization, basic vocabulary, *Tetsugaku Jii*

Abstract

Japanese vocabulary underwent a great change, extending even to basic items, as a consequence of the production of many words under the influence of European civilizational elements from the end of the Edo era to the beginning of the Meiji era. This study was undertaken with the aim of achieving a quantitative overview of historical changes in vocabulary in Japanese, in particular, the process of popularization of Meiji scholarly terms that appear in the basic vocabulary lists of present-day Japanese or in the vocabulary of various media (magazines, newspapers, television) from Meiji to the present. It is concluded that some Meiji scholarly terms have deeply penetrated into the base of present-day Japanese, as such terms form part of basic vocabulary lists and of higher-frequency ranks of vocabulary lists of present-day media. It is inferred that popularization of these scholarly terms in magazines occurred rapidly early in Meiji, and that the essentials of present-day Japanese vocabulary were being formed around 1900.